

多摩川夢の桜街道／あきる野の桜札所での語りを終えて

桜、つつじの饗宴の中で 「源氏物語～花の宴」



好きな色は何か、と聞かれたら、真っ先にピンクと答えます。身の回りの持ち物を取ってみても、手帳がショッキングピンク、スカーフがコスモスピンク、タオルハンカチがマジエンタ、と私にはピンク色のものが実に多いのです。そこから派生してオレンジや黄色、ラベンダー、紫などに目移りすることもあります、やはりピンクです。桜の時期がとても好きな理由のひとつは、大好きな色の花がそこそこに咲き現れるからと言ってもいいかもしれません。しかも種類によって濃淡あり、そのグラデーションたるや、なんともいえず心が浮き立ちます。そんな私の色の楽しみを、最高の形で呈してくれたのが、龍珠院でした。

花の寺とは聞いていました。また、写真で以前見たこともあります。けれど、それを目の当たりに見たときの感動といたらどうでしょう。まだ到着する前のずっと遠くから、薄いピンクの濃淡に混じって、私の大好きなショッキングピンクも見えます。ショッキングピンクが好きなわけは、学生時代、初めてお化粧をしたときに付けた口紅の色だったのです。その口紅を塗ると、さっぱりした童顔の私が、鏡の中でたちまち艶やかな「女」に変身し、不思議と自信がこみ上げてくるのです。清楚と艶の両方の色色、あきる野の山間の寺の境内に向かう坂道、その両側の斜面に至るまで、密に重なりあっています。ピンクの錦とでもいましょうか。しかも真昼の春の陽を受けて、目に沁みるほど鮮やかです。近づいていくにつれ、濃いピンクのほうは、「みつばつつじ」だということがわかりました。そしてこれまで漠然とショッキングピンクと外国名で呼んでいたその色には、「つつじ色」という和名があったのだということを思い出しました。桜色、桃色、なでしこ色、ぼたん色…。ピンク系の和名の色には花の名前がついているものが多いのです。桜もつつじもあふれるほどの花盛りの門を通過したときの興奮といたら、「もう、いつ死んでも悔いはない」と思うほどでした。

お堂で「源氏物語」の「花の宴」を古文に現代文を交えてお届けいたします。お堂の南向きに面した側には縁側があり、そこから先ほどの桜やつつじが今度は内側から、目の前に密集した花々を見せています。公演の直前に一瞬驚くほどの強風が吹き、お庭を見たら、境内いっぱい空間に桜吹雪が舞っていました。境内にある一本の大きなしだれ桜も枝を揺らしていました。しばらく風の向くままに花びらの群舞が続き、こちら側に風が吹いたと思ったら、縁側や座敷に花びらがたくさん舞い込んできました。和尚様はあわてて自ら箒をお持ちになり、お客様のおもてなしに失礼だからと、桜を掃き集め始めました。けれども私は、縁側の花びらは残していただくようお願いしました。そこはお客様が足を踏み込まないし、今日の舞台を彩る大切な役割を果たしてくれるはずだからです。自然が造ってくれた演出です。和尚様は、なお、雨戸を閉めたほうが、私が集中して語りやすいのでは、と気遣ってくださいます。何でも、以前そういう出演者がいらしたそうです。けれど、私は、境内のこの桜を横目に見ながら聴いていただくことこそ、今日の公演の価値があると思い、ガラス戸のままにさせていただきました。こうして、自然の桜の舞台装置を得て、なんとも言えない春のひとときを過ごすことができたのです。公演終了後、和尚様とフォーラムの方と私とでずいぶん長く縁側に座り込みいろいろ話をしましたが、和尚様が、最近の若者は「天国」という言葉を使うが、私は「極楽」という言葉をもっと使ってもらいたい、とおっしゃいました。

和尚様、龍珠院に参るときも、公演中も、最後の懇談も、桜とつつじの饗宴の中で行われたそれは、「死んでも悔いはない」と思うほどの「極楽」でした。帰りには、和やかに話した縁側から奥様と立ったままずっと見えなくなるまで見送っていただきましたこと、今でも目に焼きついています。ありがとうございました。

桜の語り部 平野 啓子



染井吉野や紅枝垂桜がひととき美しい七十五番札所・龍珠院での桜の語りは、平成21年4月、美しい多摩川フォーラム主催の桜の札所巡りに参加された60人の方を前に行われ、桜吹雪舞う中、幻想的な空間を創り出していました。桜の語りは、今年も、そして来年も続きます。